津田梅子

(つだ・うめこ)

１８６８年明治維新になり、それ以後日本の近代化が急速に進められていったが、女性の地位は昔と同じように男性よりずっと低かった。ヨーロッパやアメリカを旅行し、いろいろ見聞きして来た明治政府の指導者の一人は、アメリカの女性には教養があり、その社会的地位も高いのに驚き、次のように考えた。「立派な人間を育てるのには、家庭にいて子供の教育をする母親に教養がなければならぬ。教養のある母親をつくるためには女子教育をさかんにせねばならぬ。そのためには、女性を外国に留学させるべきだ」

彼の述べた意見にもとづいて、政府は早速女性を何人か外国に留学させることにした。
１８７１年、５人の若い女性がアメリカに送られた。そのなかに、７才になったばかりの津田梅子という女の子がいた。彼女はワシントン郊外のジョージタウンに行き、そこでアメリカの自由な教育を受けることになった。

梅子は１１年間アメリカで勉強した後、１８８２年日本に帰ったが、梅子を待っていたのは、未だに女性の地位が極端に低い日本の社会と、女性に対して保守的な考えを持っていた父親の封建的な態度だった。梅子の父親は、二度も外国にいった経験があり、進歩的な男性のはずだったが、梅子に対しては厳しく、自分に服従することを始終強制した。

帰国してから３年後、政府の重要な仕事をしている人から、ある学校で英語教師の仕事をしてみないか、という話があった。梅子は、ちょうど父親の態度に抵抗を感じ、家を出たいと思っていたところだったので、すぐにその仕事を引き受けた。ところが、その学校の教育の目的が、夫に従う良い妻、家庭にいて子供を立派に育てる母親をつくること、つまり従属的女性をつくることだったので、アメリカで一緒に生活した家族から愛と信頼を受けて自由な雰囲気のなかで大きくなった梅子には働きにくかった。

http://language.tiu.ac.jp/materials/jpn/yomu/yomu07.html

アメリカでの自由な生活が忘れられない梅子は、再びアメリカで勉強しようと、１８８９年フィラデルフィアの近くにあるブリンマー・カレッジへ留学し、そこで３年間生物学を勉強した。アメリカで生き生きとした女性の生活をみれば見るほど、日本の女性の地位を向上させる必要性を痛感し、日本に帰ったら、女性達のために仕事をしようと決意した。

１８９２年に帰国したが、その頃日本には女性が高等教育を受けることができる学校は一つだけしかなかった。そこで、梅子は、自分で自由な教育ができる学校を作ろうと考え、８年後にとうとう東京に「女子英学塾（じょしえいがくじゅく）」という私立の大学をつくり、女性達の教育をはじめた。その学校が、今、日本で最も有名な女子大学の一つである「津田塾大学（つだじゅくだいがく）」になったのである。

明治維新 - Meiji Restaurationen
地位 - position, status
政府 - regering
教養 - dannelse
驚く - blive overrasket
教育 - uddannelse
べきだ - bør
にもとづいて - baseret på
未だに - selv nu
極端 - ekstremt
保守的な - konservativ
封建的な - feudal
態度 - holdning
進歩的な - progressiv
服従 - lydighed
始終 - altid
強制 する - gennemtvinge
抵抗 - modstand
引き受ける - påtage sig
従属的 - underkastet, afhængig
雰囲気 - atmosfære
再び - igen
生き生きとした - livlig
向上 - højne
必要性 - nødvendighed
痛感する - føle stærkt
決意する - beslutte sig for
高等教育 - højere uddannelse

「津田梅子」

１８６８年明治維新になり、それ以後日本の近代化が急速に進められていったが、女性の地位は昔と同じように男性よりずっと低かった。ヨーロッパやアメリカを旅行し、いろいろ見聞きして来た明治政府の指導者の一人は、アメリカの女性には教養があり、その社会的地位も高いのに驚き、次のように考えた。

「立派な人間を育てるのには、家庭にいて子供の教育をする母親に教養がなければならぬ。教養のある母親をつくるためには女子教育をさかんにせねばならぬ。そのためには、女性を外国に留学させるべきだ」

彼の述べた意見にもとづいて、政府は早速女性を何人か外国に留学させることにした。１８７１年、５人の若い女性がアメリカに送られた。そのなかに、７才になったばかりの津田梅子という女の子がいた。彼女はワシントン郊外のジョージタウンに行き、そこでアメリカの自由な教育を受けることになった。

梅子は１１年間アメリカで勉強した後、１８８２年日本に帰ったが、梅子を待っていたのは、未だに女性の地位が極端に低い日本の社会と、女性に対して保守的な考えを持っていた父親の封建的な態度だった。梅子の父親は、二度も外国にいった経験があり、進歩的な男性のはずだったが、梅子に対しては厳しく、自分に服従すること

を始終 強制　した。

帰国してから３年 後、政府の重要　な仕事をしている人 から、ある学校 で英語教師 の仕事をしてみないか、という話　があった。梅子は、ちょうど父親 の態度に抵抗 を感じ、家 を出たいと思っていたところだったので、すぐにその仕事を引き受けた。ところが、その学校 の教育　の目的 が、夫　に従う良い妻 、家庭にいて子供を立派に育てる母親 をつくること、つまり従属　的 女性 をつくることだったので、アメリカで一緒 に生活 した家族から愛 と信頼 を受けて自由な雰囲気のなかで大きくなった梅子には働きにくかった。

アメリカでの自由な生活 が忘れられない梅子は、再びアメリカで勉強しようと、１８８９年 フィラデルフィアの近くにあるブリンマー・カレッジへ留学　し、そこで３年間 生物 学 を勉強　した。アメリカで生き生きとした女性 の生活 をみれば見るほど、日本 の女性 の地位を向上　させる必要 性 を痛感 し、日本 に帰ったら、女性達 のために仕事をしようと決意した。

１８９２年 に帰国したが、その頃 日本 には女性 が高等 教育　を受けることができる学校 は一つだけしかなかった。そこで、梅子は、自分で自由な教育　ができる学校 を作ろうと考え、８年 後にとうとう東京　に「女子英学 塾　（じょしえいがくじゅく）」という私立の大学をつくり、女性 達 の教育　をはじめた。その学校 が、今 、日本 で最も

ゆうめい　じょしだい がく　ひと　つだじゅくだいがく
有名 な女子大学 の一つである「津田塾大学（つだじゅくだいがく）」になったのである。